大阪大学では、専門的な「知の探究」のみならず、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促すため、「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」(Double-Wing Academic Architecture: 通称DWAA) を導入しています（https://itgp.osaka-u.ac.jp/systems/dwaa/）。諸部局を横断する組織としての本拠点は、このシステムに基づいて、「大学院等高度副プログラム」「人文社会科学系オナー大学院プログラム」に、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促す横断型の教育ユニットを提供しています。

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」

プログラム紹介

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」（英語名Global Japanese Studies。以下、GJSプログラム）は、日本研究の最先端の成果を学祭的に学ぶとともに、そのコンテンツを英語で発信するためのスキルを高めることを意図して2017年に開講した教育プログラムです。現在、人文・社会科学系部局の協力のもと、グローバル日本学教育研究拠点により企画・運営されており、文系・理系を問わず、日本研究の最先端を学び世界に発信したい大学院生を対象としています。以下の3つの到達目標に対応する形で、科目が構成されています。

プログラムの到達目標（修了時に身に付く能力）

①複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。
②海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。
③日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身に付けている。

①の目標に対応して提供されているのは、日本の日本研究の最先端の成果を日本語で講じる講義科目で、②③の目標に対応して提供されているのは、英語圏の日本研究の最新の成果を学ぶ講義科目と、自分の研究成果を英語で発信する力を高めるための演習科目です。

受講生からのメッセージ

北村都和
人文学研究科日本学専攻 博士前期課程2年

私は日本史学分野に所属しており、なかでも日本の特定の地域について研究しているため、大学院に進学してから海外のことに触れる機会はほとんどありませんでした。しかし一方で、「日本が他国からどのように見られているか」にも興味があったため、GJSを履修しました。自分の研究だけをしていたら少なくとも発見することがなかった、新たな観点を見出せられることが大きな特徴だと思います。特に、海外をバックグラウンドに持つ学生との交流は、自分の今までの経験が持つ意味を再確認させてくれるものでした。また、プレゼンをする際には「自分は誰に何を伝えたいのか、どうしたら伝わるか」について深く考える必要がありました。社会に出るにあたっていずれ必要になるスキルを、このプログラムでは様々な学びや議論から身につけることができました。

Tetiana TKACHENKO
人文学研究科日本学専攻 博士前期課程2年

「グローバル・ジャパン・スタディーズ」プログラムでは、さまざまな分野のコースを幅広く提供しています。それゆえに、自分の研究に直結した授業と、知識の幅を広げるための授業の両方に出席することができました。歴史、文学、民族学に興味があるので、それらに関連する授業に参加できたのはとても嬉しかったです。また、このプログラムのおかげで、大阪大学の教授だけでなく、他大学の客員教授の講義も受けることができました。もう一つの利点は、英語と日本語の両方の科目を選択できることです。また、講義科目だけでなく演習科目もあるため、アカデミック論文を英語で書くための具体的な知識や実践的なスキルを身につけることができました。

授業担当教員からのメッセージ

Nicholas LAMBRECHT
人文学研究科准教授／
グローバル日本学教育研究拠点（グローバル拠点形成部門）兼任教員

担当科目
Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: “Interacting with Japanese Culture”
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: “The Japanese Short Story”
Advanced Academic Skills for Humanities 1: “Writing Research Papers”
Advanced Academic Skills for Humanities 2: “Presenting Research”
Issues in Contemporary Japanese Studies 1: “The Borders of Japanese Literary Studies”
Issues in Contemporary Japanese Studies 2: “The Practice of Translating Japanese Media”（3月まで）
Basic Academic Skills for Humanities 2: “Reading for Discussion”（3月まで）

今年開講したグローバル・ジャパン・スタディーズ科目は例年に比べ少なかったものの、各科目に多くの学生が受講し、ディスカッションは尽きることがありませんでした。GJS科目では、英語圏で行われている日本研究について共に考察し、批判し、時には賞賛するプロセスが、私を含め授業に参加する全員の視野を広げることに繋がると確信しています。また、日本文学関連の科目は、文学と歴史・文化の関係や、翻訳にまつわる諸問題などについて深く考える機会となりました。さらに、毎年のことながら、Advanced Academic Skills科目で学生と共に修士論文・博士論文の研究方法、研究内容、論文構成について議論を重ねる中で、学生の研究テーマに対する熱意が伝わり、強い感銘を受けています。研究成果をグローバルな場で（とりわけ英語を通じて）発信したい学生が年々増加していることから、来年に担当するGJS科目を再度増やし、次世代の研究者の育成に貢献したいと考えています。

Facundo GARASINO
グローバル日本学教育研究拠点（グローバル拠点形成部門）特任講師

担当科目
Basic Academic Skills for Humanities 1 & 2: “Reading for Discussion”
Issues in Contemporary Japanese Studies: “Global Migrations in Modern and Contemporary Japan”

今年は英語によるディスカッションの授業と講義を担当しましたが、グローバルな視点と現代的な課題を主眼として「日本」を問い直すための議論を提案しようと心掛けました。ディスカッションの授業では、人文学におけるアカデミック・スキルの基礎とも言える文献の解読に基づいた議論に必要な経験と技術を得ることを目指しました。その際、日本社会における移民や人種主義、ジェンダー問題や社会格差、少子化問題や地域の過疎化、東アジアの緊迫した国際関係や歴史認識問題などを取り上げました。多様な発想と立場に触れたいという、積極的な姿勢を持った受講者が議論を盛り上げてくれました。一方講義では、移民を軸として日本の近現代の歴史をグローバルな視点から考え直すための論点の提示を試みました。ここでも、歴史的な事象と現代社会との接点をめぐる議論をすることが多くありました。このように、今年の授業を通して、学生の関心と視点がすでに多様化・国際化していることを実感できました。これらの関心と視点をさらに発展させるべく、来年はGJS科目の内容を一層充実させ、本プログラムに期待される役割の達成に貢献したいと思います。